

## 『銀河鉄道の夜』から (3) 二人の少年の出会いと別れ

藤原 道夫

童話の主人公はジョバンニで小学5, 6年生、同級生から疎外されておりカンパネルラだけが同情的で一緒に銀河について学ぶ。父親は北の方に出稼ぎに行っており、病気がちの母親と質素な生活を送っている。生計の足しに活版所で短時間働く。星まつりの夕べ、手伝いの後に高台の草むらから天の川を眺めている間に寝てしまう。その間に見る夢が銀河鉄道に乗った話し。

ジョバンニは「銀河ステーション」と繰り返し呼ぶ声を聞きながら、気がついてみると列車に乗っていた。すぐ前の席でぬれたようなまっ黒な上着を着た少年が外を見ている。それはカンパネルラだった。二人は色彩豊かな外の景色を眺め、様々な人たちの体験談を聞きながら列車に乗ってゆく。とうとう二人きりになった。経験したことを振り返って「本当の幸いはなんだろう」とジョバンニ、「僕わからない」とカンパネルラ。「僕たちどこまでもどこまでも一緒に行こうね」と言って振り返るとカンパネルラがいない。ジョバンニはまるで鉄砲玉のように立ちあがり、力いっぱい胸をうって叫び、もう咽喉いっぱい泣く。

ジョバンニは目を開く。胸は何だかおかしくほてり頬に冷たい涙がながれていた。そしてばねのようにはね起き、お母さんのための牛乳を受け取って家に向う。途中河原に人が群れていてカンパネルラが川にはまったことを知らされる。その友はもう銀河のはずれにしかいないような気がする。友のお父さんの博士は「もう駄目です」といい、「ありがとうと感謝し、あなたのお父さんはもうすぐ帰るという知らせがあった」と話す。ジョバンニはただおじぎをする。最後はこう結ばれる「ジョバンニはもう胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方に走りました」。

物語に「本当の幸いはなんだろう」という問いが通奏低音のように流れている。果たして答えは出るのか？